

四二七 去年の秋相見しまにま今日見れば面彌珍し都方人

四二八 斯くしても相見るものを少くも年月経れば戀しけめやも

霍公鳥の喧を聞きて詠める歌一首

四二九 古よ偲びにければ時鳥鳴く聲聞きて戀しきものを

京に向てむ時、貴人を見及美人に相ひて飲宴せむ日、懷を述べむ爲備作める歌二首

四三〇 見まく欲り思ひしなべに蕨掛けかぐはし君を相見つるかも

四三一 朝參の君が姿を見ず久に鄙にし住めば我戀ひにけり

同閏五月二十八日、大伴宿禰家持が作める、

天平感寶元年閏五月六日より小旱して百姓の田畝稍凋色有り、六月朔日に至りて忽ち雨雲の

氣を見て詠める雲の歌一首短歌一絶

四三二 天皇の敷き坐す國の、天の下四方の道には、馬の蹄い盡す極、船の舳のい泊つるまでに、

古よ今の現に、萬調奉る長上と、作りたる其農業を、雨降らず日の重なれば、植ゑし田も蒔
きし畠も、朝毎に凋み枯れ行く、其を見れば心を痛み、緑兒の乳乞ふが如く、天つ水仰ぎ
てぞ待つ、足引の山の撓所に、彼の見ゆる天の白雲、海神の沖つ宮邊に、立ち渡り棚曇り
合ひて、雨も賜はね

反歌一首

四三三 彼の見ゆる雲流りて棚曇り雨も降らぬか心足ひに

右の二首は六月一日晩頭、守大伴宿禰家持が作める、

雨落を賀ぶ歌一首

四三四 我が欲りし雨は降り來ぬ斯くしあらば言擧げせずとも年は榮えむ

右の一首は同月四日、大伴宿禰家持が作める、

七夕の歌一首并短歌

四三五 天照す神の御代より、安の河中に隔て、向ひ立ち袖振り交はし、息の緒に歎かす兒等、渡
守船も設けず、橋だにも渡してあらば、その上ゆもい行き渡らし、携はり頸掛けり居て、
思ほしき事も語らひ、慰むる心はあらむを、何しかも秋にしあらねば、言問のともしき兒
等、現身の世の人我も、此處をしも妙に奇しみ、往き更る毎年毎に、天の原振放け見つ、
言繼にすれ

反歌二首

四三六 天の河橋渡せらば其上ゆもい渡らさむを秋にあらすとも

四三七 安の河い向ひ立ちて年の戀月日長き兒等が妻問の夜ぞ

右七月七日、天漢を仰見て大伴宿禰家持が作める、

越前國掾大伴宿禰池主が來贈れる戲歌四首

忽恩賜を辱くす、驚き欣ぶこと已に深し、心中咲を含み、獨座て稍開けば表裏同じからず、相違何ぞ異れる、所由を推量るに率爾に策を作す歟、明に言の如きことを知りぬ、豈他意有らめ乎、凡本物を貿易する其罪輕からず、正賊倍賊、宜しく急并滿たるべし、今風雲に勃して徵使を發遣る、早速返報したまへ、延回したまふ須らず、

勝寶元年十一月十二日、物を貿易せられし下吏、謹みて

貿易人を斷る官司の廳下に訴ふ

別白す、可憐の意、黙止り能ず、聊か四詠を詠みて唯睡覺に擬す、

四二六 草枕旅の翁と思ほして針ぞ賜へる縫はむ物もが

四二七 針袋取揚げ前に置き反さへば表も裏も糺ぎたり

四二八 針袋帯び續けながら里毎に照さひ歩けど人も咎めず

四二九 鶏が鳴く東國を指してふさへしに行かむと思へど由も實なし

右の歌の返報歌は脱漏れて探求め得ず、

更に來贈れる歌二首

驛使を迎ふる事に依りて、今月十五日部下加賀郡の境に到來る、面蔭射水の郷に見はれ、戀緒深海

の村に結ぶ、身胡馬に異ねど、心北風を悲めり、月に乗りて徘徊り、曾て爲す所無し、稍來封を開く、其辭に云ふ、著者先に奉る所の書返りて疑に度るを畏るる歟とのり給へり、僕囑羅を作り且使君を憐す、夫水を乞ひ酒を得、從來能口、論時理に合へり、何ぞ強吏と題さめや、尋て針袋の詠を誦するに、詞泉酌めども竭きず、膝を抱て獨り咲ふ、能く旅愁を獨り、陶然として日を遣る、何ぞ慮らむ何ぞ思はむ、短筆不宣

勝寶元年十二月十五日、物を徵りし下司、謹みて

不伏使君の記室に上る

別に奉る云々歌二首

四三〇 堅様にも彼にも横様も奴とぞ吾はありける主の殿外に

四三一 針袋之は賜りぬ籠袋今は得てしか翁さびせむ

宴席雪月梅花を詠める歌一首

四三二 雪の上に照れる月夜に梅の花折りて贈らむ愛しき兒もがな

右の一首は十二月、大伴宿禰家持が作める、

四三三 我が兄子が琴取るなべに常人の云ふ歎しも彌重き益すも

右の一首は少目素忌寸石竹が館の宴に、守大伴宿禰家持が作める

天平勝寶二年正月二日、國應にて諸郡司等を給饗せる宴歌一首

四三六 足引の山の木末の寄生取りて挿頭しつらくは千歳壽ぐとぞ

右の一首は守大伴宿禰家持が作める、

判官久米朝臣廣繩が館の宴の歌一首

四三七 正月立つ春の始に斯くしつゝ相し笑みてば非時めやも

同月五日、守大伴宿禰家持が作める

墾田地を檢察むる事に繰りて、礪波郡主帳多治比部北里が家に宿れる時、忽に風雨起り、辭

去らずて詠める歌一首

四三八 荊波の里に宿借り春雨に隠り障むと妹に告げつや

二月十八日、守大伴宿禰家持が作める、

卷十八 終

卷十九

天平勝寶二年三月一日の暮、春の苑の桃李の花を眺囑て詠める歌二首

四三九 春の苑紅艶ふ桃の花下照る道に出立つ媿婦

四四〇 吾が園の李の花か庭に降る斑雪の未だ残りたるかも

翻翔る鴨を見て詠める歌一首

四四一 春まけて物悲しらに小夜更けて羽振き鳴く鴨誰が田にか食む

二日、柳黛を攀ちて京師を思ふ歌一首

四四二 春の日は萌れる柳を取り持ちて見れば都の大路し思ほゆ

堅香子草の花を攀折る歌一首

四四三 物部の八十少女等が酌み亂ふ寺井の上の堅香子の花

歸雁を見る歌二首

四四四 燕來る時になりぬと雁がねは本郷偲びつゝ雲隠り喧く

四四五 春設けて斯く歸るとも秋風に黄葉む山を越え來ざらめや

夜裏千鳥の喧くを聞く歌二首

四四 深更に寝覺めて居れば河瀬尋め心も靡ぬに鳴く千鳥かも
四四 夜降ちて鳴く河千鳥宜しこそ昔の人も偲び來にけれ

曉に鳴く雉を聞く歌一首

四四 檻の野にさ躍る雉いちじろく啼にしも哭かむ隠妻かも

四四 足引の八峯の雉鳴き響む朝開の霞見れば悲しも

江より浜る船人の唄を遙聞く歌一首

四五 朝床に聞けば遙けし射水河朝漕ぎしつゝ唱ふ船人

三日、守大伴宿禰家持が館にて宴する歌三首

四五 今日のをと思ひて標めし足引の峯の上の櫻斯く咲きにけり

四五 奥山の八峯の海石榴委曲に今日は暮らさね丈夫の徒

四五 漢人も船を浮べて遊ぶ云ふ今日ぞ我が兄子花縵せよ

八日、白大鷹を詠める歌一首并短歌

四五 足引の山坂越えて、去更る年の緒長く、級避る越にし住めば、大君の敷き坐す國は、京師をも此處も同じと、心には思ふものから、語り放け見放くる人目、乏しみと思し繁し、其故に情和ぐやと、秋づけば萩咲き艶ふ、石瀬野に馬手繰き行きて、遠近に鳥踏み立て、白

塗の小鈴も瑠々に、合はせ遣り振放け見つゝ、憤る心の内を、思ひ伸べ喜しびながら、枕附く妻屋の内に、鳥座結ひ据ゑてぞ我が飼ふ、眞白節の鷹

反歌

四五 屋形尾の眞白の鷹を屋戸に据ゑ搔撫で見つゝ飼はくし吉しも

潜鷗歌一首并短歌

四五 荒玉の年往更り、春來れば花咲き艶ふ、足引の山下響み、落ち激ち流る辟田の、河の瀬に鮎兒さ走り、鳥つ鳥鷗養伴なへ、篝照し漂ひ行けば、吾妹子が形見がたらと、紅の八入に染めて、遣せたる衣の袖も、通りに濡れぬ

反歌

四五 紅の衣艶はし辟田河絶ゆることなく吾還り見む

四五 毎年に鮎し走らば辟田河鷗八頭潜けて河瀬尋ねむ

季春三月九日、出擧の政に擬りて舊江村に行き、道上に目を物花に屬くる歌、并興中詠める歌

澁溪崎を過ぎて巖上の樹を見る歌一首樹の名

四五 磯の上の都萬麻を見れば根を延へて年深からし神さびにけり

世間の常無きを悲しむ歌一首并短歌

四二六 天地の遠き始よ、俗中は常なきものと、語り續ぎ流らへ來れ、天の原振放け見れば、照る月も盈戻しけり、足引の山の木末も、春されば花開き匂ひ、秋づけば露霜負ひて、風交り黄葉散りけり、現身も斯くのみならし、紅の色も移ろひ、射干玉の黒髪變り、朝の笑暮變らひ、吹く風の見えぬが如く、逝く水の止らぬ如く、常もなく移ろふ見れば、行潦流るゝ涙、止めかねつも

反歌

四二六 言問はぬ木すら春咲き秋づけば黄葉散らくは常を無みこそ

四二六 現身の常無き見れば世間に心附けずて思ふ日ぞ多き

豫め詠める七夕の歌一首

四二六 妹が袖吾枕かむ河の瀬に霧立ち渡れ小夜更けぬとに

勇士の名を振ふを慕ふ歌一首并短歌

四二六 銀杏の實の父の命、柞葉の母の命、凡ろかに情盡して、思ふらむ其子なれやも、丈夫や空しくあるべき、梓弓末振起し、投箭以ち千尋射渡し、劍刀腰に取り佩き、足引の八峯踏み越え、差任くる情障らず、後の代の語り繼ぐべく、名を立つべしも

反歌

四二六 丈夫は名をし立つべし後の代に聞繼ぐ人も語り續ぐがね

右の二首は山上憶良臣が詠める歌に追ひて和ふ、

霍公鳥并時花を詠める歌一首并短歌

四二六 毎時に彌珍しく、八千種に草木花咲き、鳴く鳥の聲も變らふ、耳に聞き目に視る毎に、打歎き萎え憂侘れ、惚びつゝあり來る間に、木の暗の四月し立てば、夜隠りに鳴く時鳥、古よ語り繼ぎつる、鶯の現眞子かも、菖蒲花橋を、少女等が珠貫くまでに、赤根刺す晝は終日に、足引の八丘飛び越え、夜干玉の夜は終夜に、曉の月に向ひて、往き還り鳴き響むれど、如何で飽き足らむ

反歌 二首

四二六 毎時に彌珍しく咲く花を折りも折らずも見らくし好しも

四二六 毎年来鳴くもの故時鳥聞けば惚ばく逢はぬ日を多み

右二十日、未だ時に及ばずと雖も興に依けて豫め詠める也、

家婦が京に在す尊母に贈らむ爲に、詠へらえて詠める歌一首并短歌

四二六 時鳥來鳴く五月に、咲き艶ふ花橋の、香ぐはしき親の御言、朝暮に聞かぬ日數多く、天放る夷にし居れば、足引の山の撓所に、立つ雲を外のみ見つゝ、歎く心安けくなくに、思ふ心苦

しきものを、奈吳の海士の潛き取る云ふ、眞珠の見た欲し御面、直向ひ見む時までは、松
柏の榮えいまさね、尊き吾が君

反歌一首

四七〇 白玉の見た欲し君を見ず久に夷にし居れば生けるともなし

二十四日、立夏四月の節に應れり、此に因りて二十三日の暮、忽ち時鳥の曉に鳴かむ聲を思ひ
て詠める歌二首

四七一 常人も起きつゝ聞くぞ時鳥この曉に來鳴け初聲

四七二 時鳥來鳴き響まば草取らむ花橋を宿には植ゑずて

京の丹比が家に贈れる歌一首

四七三 妹を見ず越の國邊に年経れば吾が心神の和ぐる日もなし

筑紫の太宰の時の春の苑の梅を追和る歌一首

四七四 春の裏の樂しき終へば梅の花手折り持ちつゝ遊ぶにあるべし

右の一首は二十七日、興に依けて作める、

霍公鳥を詠める歌二首

四七五 時鳥今來鳴き始む菖蒲蕨くまでに離るる日あらめや毛能波三箇の
辭之を調く

四七六 我が門よ鳴き過ぎ渡る時鳥彌懐かしく聞けど飽足らず毛能波氏爾乎六
節の辭之を調く

四月三日、越前判官大伴宿禰池主に贈れる霍公鳥の歌、感舊の意に勝へずて懷を述ぶる一首

并短歌

四七七 我が兄子と手携はりて、曉來れば出で立ち向ひ、暮されば振放け見つゝ、思ひ暢べ見和ぎ
し山に、八峯には霞棚引き、谿邊には海石榴花咲き、心愛し春の過ぐれば、霍公鳥彌頻き
鳴きぬ、獨のみ聞けば不恰しも、君と吾隔てゝ戀ふる、利波山飛び越え行きて、明立たば松
の小枝に、暮さらば月に向ひて、菖蒲玉貫くまでに、鳴き響め安寝しなさず、君を惱ませ

反歌

四七八 吾のみし聞けば不恰しも時鳥丹生の山邊にい行き鳴けやも

四七九 時鳥夜喧をしつゝ、我が兄子を安寝ななせそゆめ情あれ

時鳥を感じる情に飽かず懷を述べて詠める歌一首并短歌

四八〇 春過ぎて夏來向へば、足引の山呼び響め、小夜中に鳴く時鳥、初音を聞けば懐かし、菖蒲
花橋を、貫き交へ蕨くまでに、里響め鳴き渡れども、尙し思ばゆ

反歌 三首

四八一 小夜更けて 曉月に影見えて鳴く時鳥聞けば懐かし

四八二 時鳥聞けども飽かず網取りに獲りて懐けな離れず鳴くがね
四八三 時鳥飼ひ通せらば今年経て來向ふ夏は先づ鳴きなむを

京師より贈來せる歌一首

四八四 山吹の花執り持ちてつれもなく離れにし妹を偲びつるかも

右四月五日、郷に留れる女郎より送せたるなり、

山吹の花を詠める歌一首并短歌

四八五 現身は戀を繁みと、春設けて念繁くば、引き攀ぢて折りも折らずも、見る毎に情和ぎむと、
繁山の谿邊に生ふる、山吹を宿に引き植ゑて、朝露に艶へる花を、見る毎に念は止まず、
戀し繁しも

反詠

四八六 山吹を宿に植ゑては見る毎に念は止まず戀こそ益れ

六日布勢の水海に遊覽びて詠める歌一首并短歌

四八七 思ふ達丈夫の、木の暗の繁き思を、見明らかめ心遣らむと、布勢の海に小船連並め、眞樞、
懸けい漕ぎ廻れば、平布の浦に霞棚引き、垂姫に藤波咲きて、濱淨く白波騒ぎ、重々に戀は
益れど、今日のみに飽足らめやも、斯くしこそ彌毎年、春花の繁き盛に、秋の葉の黄色

へる時に、在り通ひ見つゝ偲ばめ、この布勢の海を

反歌

四八八 藤波の花の盛に斯くしこそ浦漕ぎ廻みつゝ年に偲ばめ

水鳥を越前判官大伴宿禰池主に贈れる歌一首并短歌

四八九 天離る夷とし在れば、彼所此所も同じ心ぞ、家離り年の経ぬれば、現身は物思繁し、其故
に心慰に、時鳥鳴く初音を、橋の珠に合貫き、蕨きて遊ばく吉しも、丈夫を伴へ立ちて、
叔羅河漂ひ沂り、平瀬には小網指し渡し、早瀬には鵜を潛けつゝ、月に日に然し遊ばね、
愛しき我が兒子

反歌 二首

四九〇 叔羅河湍を尋ねつゝ我が兒子は鵜河立たさね心慰に

四九一 鵜河立て取らさむ鮎の其が鮪は吾に搔向け念ひし念はゞ

右九日、使に附けて贈る、

霍公鳥井藤花を詠める歌一首并短歌

四九二 桃の花紅色に、艶ひたる面輪の内に、青柳の細し眉根を、笑み撓り朝影見つつ、少女等
が手に取り持たる、眞鏡二上山に、木の暗の繁き溪邊を、呼び響め朝飛び渡り、夕月夜幽

けき野邊に、遙々に鳴く時鳥、立漏くと羽觸に散らす、藤浪の花懐かしみ、引攀ちて袖に扱入れつ、染まば染むとも

反歌

四九三 霍公鳥鳴く羽觸にも散りにけり盛過ぐらし藤浪の花

同じ九日作める

更に霍公鳥の喧くこと晩きを怨む歌三首

四九四 時鳥鳴き渡りぬと告ぐれども吾聞き繼がず花は過ぎつゝ

四九五 吾が許多慕はく不知に時鳥何方の山を鳴きか越ゆらむ

四九六 月立ちし日より招きつゝ打慕び待てど來鳴かぬ時鳥かも

京人に贈れる歌二首

四九七 妹に似る草と見しより吾が標めし野邊の山吹誰か手折りし

四九八 つれもなく離れにしものと人は云へど逢はぬ日數多み念ひぞ吾がする

右、郷に留れる女郎に贈る爲に、家婦に誂へらえて作める女郎は即ち大伴家持の妹

十二日、布勢の海水に遊覽び、多祐の灣に船泊めて藤の花を望見て各懐を述べて詠める歌四首

四九九 藤浪の影在る海の底清み沉着く石をも玉とぞ吾が見る

守大伴宿禰家持

四〇〇 多祐の浦の底さへ艶ふ藤波を挿頭して行かむ見ぬ人の爲

次官内藏忌寸繩麻呂

四〇一 聊に思ひて來しを多祐の浦に咲ける藤見て一夜經ぬべし

判官久米朝臣廣繩

四〇二 藤波を假慮に造り灣廻する人とは不知に海人とか見らむ

久米朝臣繩麻呂

時鳥の不喧を恨む歌一首

四〇三 家に行きて何を語らむ足引の山時鳥一音も鳴け

判官久米朝臣廣繩

攀折れる厚朴を見る歌二首

四〇四 吾が兄子が捧げて持たる厚朴恰も似るか青き蓋

講師僧惠行

四〇五 皇祖神の遠御代々はい布き折り酒飲むと云ふぞこの厚朴

守大伴宿禰家持

還る時邊上にて月光を仰見る歌一首
四〇六 澁溪を指して吾が行く此濱に月夜飽きてむ馬暫時止め

守大伴宿禰家持

二十二日、判官久米朝臣廣繩に贈れる霍公鳥の怨恨の歌一首并短歌

四〇七 此處にして背向に見ゆる、吾が兒子が垣内の谿に、明來れば榛の小枝に、夕されば藤の繁みに、遙々に鳴く時鳥、吾が宿の植木橋、花に散る時を未だしみ、來鳴かなく其は怨みず、然れ共谷片就きて、家居れる君が聞きつゝ、告げなくも憂し

反歌

四〇八 吾が許多待てど來鳴かぬ時鳥一人聞きつゝ、告げぬ君かも

時鳥を詠める歌一首并短歌

四〇九 谷近く家は居れども、木高くて里はあれども、時鳥未だ來鳴かず、鳴く聲を聞かまく欲りと、朝には門に出で立ち、夕には谷を見渡し、戀ふれども一聲だにも、未だ聞えず

反歌

四一〇 藤浪の繁りは過ぎぬ足引の山時鳥何か來鳴かぬ

右二十三日 拯 久米朝臣廣繩和

處女墓の歌に追ひて和ふる一首并短歌

四一一 古に有りける事の、希代しき事と言ひ繼ぐ、血沼壯士菟原壯士の、現身の名を争ふと、玉剋命も捨て、相共に燭問しける、少女等が聞けば悲しき、春花の薰え榮えて、秋の葉の艶に照れる、惜身の壯をすらに、丈夫の語いとほしみ、父母に啓し別れて、家離り海邊に出立ち、朝暮に滿ち來る潮の、八重浪に靡く玉藻の、節の間も惜しき命を、露霜の過ぎましにけれ、奥墓を此處と定めて、後の代の聞繼ぐ人も、彌遠に偲びにせよと、黄楊小櫛其が指しけらし、生ひて靡けり

反歌

四一二 處女らが後の表と黄楊小櫛生ひ更り生ひて靡きけらしも

右五月六日、興に依けて大伴宿禰家持が作める、

四一三 東風を疾み奈吳の浦廻に寄する浪彌千重頻に戀ひ渡るかも

右の一首は京の丹比が家に贈る、

挽歌一首并短歌

四一四 天地の初の時よ、現身の八十伴の緒は、大君に仕ふものと、定めたる官にしなければ、大君の命かしこみ、夷放る國を治むと、足引の山河阻り、風雲に言は通へど、直に逢はぬ日の

累れば、思ひ戀ひ氣衝き居るに、玉梓の道來る人の、傳言に吾に語らく、愛しきよし君は
此頃、心荒びて嘆かひ坐す、世間の憂けく辛けく、開く花も時に移るふ、現身も常なくあ
りけり、垂乳根の御母の命、何しかも時しはあらむを、眞鏡見れども飽かず、玉の緒の惜
しき盛に、立つ霧の失せぬる如く、置く露の消ぬるが如く、玉藻なす靡き轉伏し、逝く水
の留みかねきと、狂言や人の言ひつる、妖言か人の告げつる、梓弓爪引く夜音の、遠音に
も聞けば悲しみ、庭潦流るゝ涙、留めかねつも

反歌二首

四二五 遠音にも君が嘆くと聞きつれば哭のみし泣かゆ相思ふ吾は

四二六 世の中の常なき事は知るらむを心盡すな大夫にして

右大伴宿禰家持が、賀南右大臣家藤原二郎の慈母の喪を弔らへるなり、五月二十七日

霖雨晴るゝ日詠める歌一首

四二七 卯の花を腐す霖雨の水始に縁る木蔭如す縁らむ兒もがも

漁夫の火光を見る歌一首

四二八 鮪衝くと海人の燭せる漁火の秀にか出さむ吾が下念を

右の二首は五月

四二九 吾が宿の萩咲きにけり秋風の吹かむを待たばいと遠みかも

右の一首は六月十五日、芽子早花を見て詠める、

京師より來贈せる歌一首并短歌

四三〇 海神の神の命の、御櫛笥に貯ひ置きて、齋く云ふ珠に勝りて、思へりし吾が子にはあれど、
現身の世の理と、丈夫の引の隨意に、級避る越路を指して、延ふ葛の別れにしより、沖
つ浪撓む眉引、大船の揺々に、面影にもとな見えつゝ、斯く戀ひば老附く吾が身、蓋し堪
へむかも

反歌一首

四三一 斯くばかり戀しくしあらば眞鏡見ぬ日時なくあらましもを

右の二首は大伴氏坂上郎女が女子の大嬢に賜ふ也

九月三日宴の歌二首

四三二 この時雨甚くな降りそ吾妹子に見せむが爲に黄葉採りてむ

右の一首は椽久米朝臣廣繩が作める、

四三三 青丹吉奈良人見むと吾が兄子が標めけむ黄葉地に落ちめやも

右の一首は守大伴宿禰家持が作める、

四三四 朝霧の棚引く田居に鳴く雁を留め得めやも吾が宿の萩

右の一首歌は吉野の宮に幸し、時、藤原皇后の御作、但し年月審詳ならず、十月五日河邊朝臣東人が傳誦めり、

四三五 足引の山の黄葉に雫合ひて散らむ山道を君が越えまく

右の一首は同月十六日、朝集使少目泰忌寸石竹を饒する時、守大伴宿禰家持が作める
雪日詠める歌一首

四三六 この雪の消遺る時にいざ行かな山橋の實の照るも見む

右の一首は十二月、大伴宿禰家持が作める、
雪の歌一首并短歌

四三七 大殿のこの廻の、雪な踏みそね、數も降らざる雪ぞ、山のみ降りし雪ぞ、ゆめ縁る
な人や、な履みそね雪は

反歌一首

四三八 在りつゝも御見し給はむぞ大殿の此の廻の雪な履みそね

右の二首歌は三形沙彌が、贈左大臣藤原北卿の語を承けて作誦り、之を聞き傳ふるは笠朝臣子君なり、復後に傳讀むは越中國掾久米朝臣廣繩なり、

天平勝寶三年

四三九 新しき年の始は彌年に雪踏み平し常斯くにもが

右の一首歌は正月二日守の館にて集宴せり、於時雪降り積むこと有四尺なりき、即ち主人大伴宿禰家持此歌を詠めり、

四四〇 降る雪を腰に惱煩みて参り來し驗もあるか年の初に

右の一首は三日、介内藏忌寸繩麻呂が館に會集ひ宴樂せる時、大伴宿禰家持が詠める、
于時積雪重巖の趣を彫成し、奇巧に草樹の花を綵發く、此に屬きて掾久米朝臣廣繩が詠める歌一首

四四一 瞿麥は秋咲くものを君が家の雪の巖に咲けりけるかも

遊行女婦蒲生娘子が歌一首

四四二 雪の島巖に殖てる瞿麥は千代に咲かぬか君が挿頭に

是に諸人酒酣にして更深鶏鳴く、此に因りて主人内藏忌寸繩麻呂が詠める歌一首

四四三 打羽振き鶏は鳴くとも此くばかり降り敷く雪に君歸座さめやも

守大伴宿禰家持が和ふる歌一首

四四四 鳴く鶏は彌頻き鳴けど降る雪の千重に積みこそ吾立ち難ね

太政大臣藤原家の縣犬養命婦が天皇に奉れる歌一首
天雲をほろに踏みあたし鳴神も今日に益りて恐れめやも

右の一首傳誦めるは掾久米朝臣廣繩也、
死妻を悲傷しむ歌一首并短歌作主未詳

四三六 天地の神は無かれや、愛しき吾が妻離る、光る神鳴波多嬌婦、手携ひ共に在らむと、思ひしに心違ひぬ、言はむ術爲む術不知に、木綿襷肩に取り掛け、倭文幣を手に取り持ちて、な離けそと我は禱めれど、纏きて寝し妹が袂は、雲に棚引く

反歌一首

四三七 現にと思ひてしかも夢のみに袂纏き寝と見れば術無し

右の二首、傳誦めるは遊行女婦蒲生なり、

二月三日、守の館に會集ひて宴して詠める歌一首

四三八 吾が往若し久ならば梅柳誰と共にか吾が蕚かむ

右判官久米朝臣廣繩正税帳を以ちて京師に入らむとす、仍守大伴宿禰家持此歌を詠めり、但し越中の風土、梅花柳絮三月に咲初むのみ、
霍公鳥を詠める歌一首

四三九 二上の峯の上の繁に籠りにし霍公鳥待てど未だ來鳴かず

右四月十六日、大伴宿禰家持が詠める、

春日にて祭神せる日、藤原太后の御作歌一首、即ち入唐大使藤原朝臣清河に賜ふ

四四〇 大船に眞楫繁貫き此の吾子を韓國へ遣る齋へ神等

大使藤原朝臣清河が歌一首

四四一 春日野に齋く御室の梅の花榮えて在り待て還り來むまで

大納言藤原卿の家にて入唐使等を饒する宴日の歌一首即主人卿作之

四四二 天雲の去還りなむもの故に念ひぞ我がする別悲しみ

民部少輔多治比真人土作が詠める歌一首

四四三 住吉に齋く祝が神言と行くとも來とも船は早けむ

大使藤原朝臣清河が歌一首

四四四 荒玉の年の緒長く吾が念へる兒等に戀ふべき月近づきぬ

天平五年、入唐使に贈れる歌一首并短歌作主未詳

四四五 虚みつ倭の國、青丹吉平城の京師ゆ、忍照る難波に下り、住吉の三津に船乗り、直渡り日の入る國に、遣はさる吾が兄の君を、懸けまくの忌々し恐き、住吉の吾が大御神、船の舳

に領き座し、船艦に御立たし座して、指寄らむ磯の崎崎、榜ぎ泊てむ泊々に、荒き風浪に遇はせず、平けく率て歸りませ、本の國家に

反歌一首

四四六 沖つ浪邊浪な立ちそ君が船榜ぎ歸り來て津に泊つるまで

阿部朝臣老人が唐に遣さるゝ時、母に奉れる悲別の歌一首

四四七 天雲の遠隔の極吾が思へる君に別れむ日近くなりぬ

右件の八首歌は傳誦める人、越中大目高安倉人種麻呂なり、但し年月の次は聞ける時の隨にあげたり、

七月十七日に少納言に遷任されて、仍悲別の歌を詠みて、朝集使掾久米朝臣廣繩が館に贈貽れる二首

既に六載の期に滿ち、忽ち遷替の運に値ふ、こゝに舊に別るゝの悽、心中に鬱結し、涕を拭ふの袖、何を以て能く早かむ、因悲歌二首を詠みて、式て莫忘の志を遣せり、其詞に曰く

四四八 荒玉の年の緒長く相見てし彼の心引き忘らえめやも

四四九 伊波世野に秋芽子凌ぎ馬並めて小鷹獵だに爲すや別れむ

右八月四日贈れりき、

便ち大帳使を附け八月五日京師に入らむとす、此に因りて四日に國廚の饌を介内藏忌寸繩

四五〇 級避る越に五箇年住みくゝて立別れまく惜しき初夜かも

麻呂が館に設けて饒す、時に大伴宿禰家持が詠める歌一首

五日平且上道す、仍國司次官已下諸僚まで皆視送す、於時射水郡の大領安努君廣島が門前の林中に預め饌餼の宴を設す、時に大帳使大伴宿禰家持が内藏忌寸繩麻呂が蓋を捧ぐる歌に

和ふる一首

四五二 王梓の道に出立ち行く吾は君が言跡を負ひてし行かむ

正税帳使掾久米朝臣廣繩、事畢りて退任、越前國掾大伴宿禰池主が館に適遇ひて共に飲樂す、于時久米朝臣廣繩が芽子花を囑て詠める歌一首

四五三 君が家に植ゑたる芽子の初花を折りて挿頭さな旅別るとち

大伴宿禰家持が和ふる歌一首

四五四 立ちて居て待てど待ち兼ね出で、來て君に此處に遇ひ挿頭しつる芽子

京に向る路上にて輿に依け預め詠める、宴に侍りて詔を應る歌一首并短歌

四五五 秋津島大和の國を、天雲に磐船浮べ、艦に舳に眞楫繁貫き、い榜ぎつゝ國見し爲して、天降り座し掃ひ平げ、千代累ね彌爾繼に、知らし來る天の日嗣と、神ながら我が大君の、天の下治め賜へば、物部の八十伴の緒を、撫で賜ひ齊へ賜ひ、食國の四方の人をも、餘さは

す慰み賜へば、古よ無かりし瑞、遍數多く申したまひぬ、手拱きて事無き御代と、天地日月と共に、萬世に記し續がむぞ、八隅知し吾が大君、秋の花其が色々に、見し賜ひ明らめたまひ、酒宴榮ゆる今日の、奇に貴さ

反歌一首

四五 秋の花種々なれど色別に見し明らむる今日の貴さ

左大臣橋卿を壽がむと預め詠める歌一首

四五 古に君が三代經て仕へけり吾が大君は七世申さね

十月二十二日、左大辨紀飯麻呂朝臣が家にて宴する歌三首

四五六 手束弓手に取り持ちて朝獵に君は立たしぬ棚倉の野に

右の一首は治部卿船王の傳誦める、久邇京の時の歌なり、作主知らず、

四五六 明日香河河戸を清み後れ居て戀ふれば都彌遠避きぬ

右の一首は左中辨中臣朝臣清麻呂が傳誦める、古き京の時の歌なり、

四五六 十月時雨の降れば吾が兄子が宿の黄葉散りぬべく見ゆ

右の一首は少納言大伴宿禰家持が、當時梨の黄葉を曬て此歌を詠めり、

天平勝寶四年

壬申の年の亂平定ぎし後の歌二首

四六〇 大君は神にし座せば赤駒の匏匏ふ田井を京師と爲しつ

右の一首は大將軍贈右大臣大伴卿の作みたまふ、

四六一 大君は神にし座せば水鳥の多集く水沼を皇都と爲しつ

右の一首は二月二日開きて即ち茲に載く、

閏三月、衛門督大伴古慈悲宿禰が家にて、入唐副使同胡鷹宿禰等を饒する歌二首

四六二 唐國に往き満足して歸り來む丈夫武雄に御酒獻る

右の一首は多治比真人鷹主が副使大伴胡鷹宿禰を壽く也、

四六三 櫛も見じ屋内も掃かじ草枕旅行く君を齋ふと思ひて作者未詳

右の二首歌傳誦めるは大伴宿禰村上、同清繼なり、

從四位上高麗朝臣福信に勅して難波に遣し、酒肴を入唐使藤原朝臣清河等に賜へる御歌一首

并短歌

四六四 虚見つ大和の國は、水の上は地行く如く、船の上は床に居る如、大神の鎮へる國ぞ、四つの船舶の舳並べ、平安けく早渡り來て、返言奏さむ日に、相飲まむ酒ぞ、斯の豊御酒は

反歌一首

四六五 四つの船早歸り來と白紙著け朕が裳の裾に鎮ひて待たむ

右は勅使を發遣し、并に酒を賜へる樂宴の日月未だ詳審なることを得ざる也、
詔を應らむが爲に、備め詠める歌一首并短歌

四六六 足引の八峯の上の、樛の木の彌繼々に、松が根の絶ゆる事無く、青丹吉奈良の都に、萬代に國知らさむと、八隅知し吾が大君の、神ながら思ほし召して、豐宴見す今日の日は、物部の八十伴の雄の、島山に熟る橋、鬢華に指し紐解き放けて、千年壽ぎ壽き響もし、ゑらゑらに仕へ奉るを、見るが貴さ

反歌

四六七 天皇の御代萬代に斯くしこそ見し明らか、立つ毎年に

右の二首は大伴宿禰家持が作める、

天皇と太后と、共に大納言藤原家に幸し、日黄葉せる澤關、一株を拔取りて、内侍佐佐貴山君に持たしめ、大納言藤原卿并陪從大夫等に遺賜へる御歌一首
命婦が誦へて曰へらく

四六八 この里は繼ぎて霜や置く夏の野に吾が見し草は黄葉ちたりけり

十一月八日、太上天皇左大臣橋朝臣の宅に在して肆宴きこしめす歌四首

四六九 外のみに見つゝありしを今日見れば年に忘れず思ほえむかも

右の一首は太上天皇御製

四七〇 葎蔓ふ賤しき宿も大皇の座さむと知らば玉敷かましを

右の一首は左大臣橋卿

四七一 松陰の清き濱邊に玉敷かば君來まさむか清き濱邊に

右の一首は右大辨藤原八東朝臣

四七二 天地に足らはし照りて吾が大皇敷き座せばかも樂しき小里

右の一首は少納言大伴宿禰家持 未奏

二十五日、新嘗會の肆宴に詔を應る歌六首

四七三 天地と相榮えむと大宮を仕へ奉れば貴く歡しき

右の一首は大納言巨勢朝臣

四七四 天にはも五百つ綱延ふ萬代に國知らさむと五百つ綱延ふ

右の一首は式部卿石川年足朝臣

四七五 天地と久しきまでに萬代に仕へ奉らむ黒酒白酒を

右の一首は從三位文屋智奴麻呂真人

四七六 島山に照れる橋髻華に挿し仕へ奉らな卿大夫等

右の一首は右大辨藤原八束朝臣

四七七 袖垂れていざ吾が苑に鶯の木傳ひ散らす梅の花見に

右の一首は大和國守藤原永手朝臣

四七八 足引の山下日蔭蔽ける上にや更に梅を賞ばむ

右の一首は少納言大伴宿禰家持

二十七日、林王の宅にて但馬の案察使橋奈良麿朝臣を餞せる宴歌三百

四七九 能登河の後は逢はめど暫時も別ると言へば悲しくもあるか

右の一首は治部卿船王

四八〇 立別れ君が往まさば磯城島の人はずじく齋ひて待たむ

右の一首は右京少進大伴宿禰黑麻呂

四八一 白雪の降り敷く山を越え行かむ君をぞもとな息の緒に思ふ

左大臣尾を換へて、息の緒にすると云ふ、然れども猶喻して曰く前の如く之を誦へよと、

右の一首は少納言大伴宿禰家持

五年正月四日、治部少輔石上朝臣宅嗣が家にて宴する歌三百

四八二 事繁み相問はなくに梅の花雪に萎れて變はむかも

右の一首は主人石上朝臣宅嗣

四八三 梅の花開けるが中に含めるは戀や籠れる雪を待つとか

右の一首は中務大輔茨田王

四八四 新しき年の始に思ふ達い群れて居れば歡しくもある哉

右の一首は大膳大夫道祖王

十一日、大雪落積尺有二寸、因拙懷を述ぶる歌三首

四八五 大宮の内にも外にも珍しく降れる大雪な踏みそね惜し

四八六 御園生の竹の林に鶯は屢鳴きにしを雪は降りつゝ

四八七 鶯の鳴きし垣内に艶へりし梅此の雪に變ふらむか

十二日、内裏に侍ひて千鳥を聞きて詠める歌一首

四八八 河渚にも雪は降れ、や宮の裏に千鳥鳴くらし居む所無み

二月十九日、左大臣橋の家宴に攀折れる柳條を見る歌一首

四八九 青柳の秀枝攀取り蕚くは君が宿にし千年壽ぐとぞ

二十三日、興に依けて詠める歌二首

四二〇 春の野に霞棚引き心可憐しこの夕影に鶯鳴くも

四二一 我が宿の五十竹葉群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも
二十五日、詠める歌一首

四二二 遅々に照れる春日に雲雀上り情悲しも獨し思へば

春の日遅々として雲雀正に啼く、悽惻の意歌に非れば撥ひ難し、仍此歌を作り式て締緒を展ぶ、但し此卷中作者名字を併せず、徒に年月所處縁起を録する者、皆大伴宿禰家持裁作せる歌詞なり、

卷十九 終

卷二十

山村に幸行し、時の歌二首

先太上天皇陪從王臣に詔し曰はく夫諸王卿等和歌を賦みて奏せと宣り給ひて即ち御口號し給はく

四二三 足引の山行きしかば山人の朕に獲しめし山裏ぞこれ

舍人親王詔を應りて和へ奉れる御歌一首

四二四 足引の山に行きけむ山人の情も知らず山人や誰

右天平勝寶五年五月、大納言藤原朝臣の家に在せる時、事を奏すに依りて請問ふ間、少主命山田史土麿、少納言大伴宿禰家持に語りけらく、昔此言を聞けりと云ひて、即ち此歌を誦めりき、天平勝寶五年八月十二日、二三大夫等各壺酒を提げて高圓野に登り、瓢か所心を述べて詠める歌三首

四二五 高圓の尾花吹き越す秋風に紐解き開けな直ならずとも

右の一首は左京少進大伴宿禰池主

四二六 天雲に雁ぞ鳴くなる高圓の萩の下葉は黄葉ち敢へむかも

右の一首は左中辨中臣清麿朝臣

四九七 女郎花秋萩凌ぎさ牡鹿の露分け鳴かむ高圓の野ぞ

右の一首は少納言大伴宿禰家持

六年正月四日、氏族人等少納言大伴宿禰家持が宅に賀集ひて宴飲する歌三首

四九八 霜の上に霰飛走り彌増しに吾は參來む年の緒永く 古今未詳

右の一首は左兵衛督大伴宿禰千室

四九九 年月は新々に相見れど吾が思ふ君は飽き足らぬかも 古今未詳

右の一首は民部少丞大伴宿禰村上

五〇〇 霞立つ春の初を今日の如見むと思へば樂しとぞ思ふ

右の一首は左京少進大伴宿禰池主

五〇一 七日、天皇(孝)太上天皇(元)皇太后(光明)東常宮の南大殿に在して肆宴きこしめす歌一首

五〇二 稻見野の清淨柏は時はあれど君を吾が思ふ時は實無し

右の一首は播磨國守安宿王奏したまへり 古今未詳

三月十九日、家持が庄の門の槻樹の下にて宴飲する歌二首

五〇三 山吹は撫でつゝ生さむ在りつゝも君來座しつゝ挿頭したりけり

右の一首は置始連長谷

四三三 吾が兄子が宿の山吹咲きてあらば止まず通はむ彌毎年

右の一首は長谷花を攀ぢ壺を掲げて到來れり、因是大伴宿禰家持此の歌を詠みて和ふ、

同月二十五日、左大臣橋卿山田御母の宅にて宴し給へる歌一首

四三四 山吹の花の盛に斯くの如君を見まくは千年にもがも

右の一首は少納言大伴宿禰家持、時の花を囑て詠める、但し未だ出さよりし間、大臣宴を罷め

給へるによりて誦擧げざりき、

霍公鳥を詠める歌一首

四三五 木の暗の繁き峯の上を時鳥鳴きて越ゆなり今し來らしも

右の一首は四月、大伴宿禰家持が作める、

七夕の歌八首

四三六 初秋風涼しき夕解かむとぞ紐は結びし妹に逢はむため

四三七 秋と言へば心ぞ痛きうたて異に花に比へて見まく欲りかも

四三八 初尾花花に見むとし天の河隔りにけらし年の緒長く

四三九 秋風に靡く河傍の和草の莞爾にしも思ほゆるかも

四四〇 秋來れば霧たちわたる天の河石並み置かば繼ぎて見むかも

四二 秋風に今か今かと紐解きて心待ち居るに月傾きぬ
 四三 秋草に置く白露の飽かずのみ相見るものを月をし待たむ
 四四 青浪に袖さへ沾れて傍ぐ船の舳舳振る程に小夜更けなむか

右七月七日夕、大伴宿禰家持が獨り天漢を仰て作める、

四二四 八千種に草木を植ゑて時毎に咲かむ花をし見つゝ偲ばな

右の一首は同月二十八日、大伴宿禰家持が作める、

四二五 宮人の袖着衣秋萩に映ひ宜しき高圓の宮

四二六 高圓の宮の裾廻の野高處に今咲けるらむ女郎花はも

四二七 秋野には今こそ行かめ物部の男女の花艶見に

四二八 秋の野に露負へる萩を手折らずて可惜盛を過ぐしてむとか

四二九 高圓の秋野の上の朝霧に妻呼ぶ牡鹿出で立つらむか

四三〇 丈夫の呼立てませばさ牡鹿の胸分け行かむ秋野萩原

右の歌六首は兵部少輔大伴宿禰家持獨り秋野を憶ひて聊か拙懷を述べて作める、

天平勝寶七歲乙未二月、相替へて筑紫の諸國に遣はさるゝ防人等が歌

四三一 畏きや詔被ふり明日ゆりや加曳が齋田嶺を妹無しにして

四三二 我が妻は甚く戀ひらし飲む水に影さへ見えて世に忘れず
 右の一首は國造丁、長下郡、物部秋持

右の一首は主帳丁、龜玉郡、若倭部身麿

四三三 時々の花は咲けども何すれぞ母云ふ花の咲き出來すけむ

右の一首は防人、山名郡、丈部眞麿

四三四 遠江白羽の磯と鰐の浦と相ひてしあらば言も通はむ

右の一首は同郡、丈部川相

四三五 父母も花にもがもや草枕旅は行くとも指擧ごて行かむ

右の一首は佐野郡、丈部黒當

四三六 父母が殿の後の百代草百代出で座せ我が歸來るまで

右の一首は同郡、生玉部足國

四三七 我が妻も繪に書き取らむ暇もが旅行く我は見つゝ偲ばむ

右の一首は長下郡、物部古麿

二月六日、防人部領使、遠江國史生坂本朝臣人上が上進れる歌の數十八首、但し拙劣歌十

一首あるは取載げず、

四三六 大君の命畏み磯に觸り海原渡る父母を置きて

右の一首は某郡助 丁、丈部造人麿

四三九 八十國は難波に集ひ舟飾り吾が爲む日ろを見も人もがも

右の一首は足 下 郡、上 丁、丹比部國人

四三〇 難波津に飭ひ飭ひて今日の日や出でて罷らむ見る母なしに

右の一首は鎌倉郡上丁、丸子連多麿

二月七日、相模國防人部領使、守從五位下藤原朝臣宿奈麿が進れる歌數八首、但し拙劣
歌五首は取載げず、

防人の悲別の心を追痛みて詠める歌一首并短歌

四三一 天皇の遠の朝廷と、不知火筑紫の國は、賊守る鎮の城ぞと、聞し食す四方の國には、人多に満ちてはあれど、雞が鳴く東國男子は、出向ひ顧みせず、勇みたる猛き軍卒と、勞ぎ給ひ任の隨意に、垂乳根の母が目離れて、若草の妻をも纏かず、荒玉の月日數みつゝ、蘆が散る難波の御津に、大船に眞樞繁貫き、朝和に水手整へ、夕潮に楫引撓り、率ひて漕ぎ行く君は、波の間をい行きさぐくみ、眞幸くも早く到りて、大君の命のまにま、丈夫の心を持ちて、在り廻り事し了らば、恙はず歸り來ませと、忌瓮を床邊に居ゑて、白妙の袖折

り返し、射干玉の黒髮敷きて、長き月日を待ちかも戀ひむ、愛しき妻らは

反歌

四三二 丈夫の鞆取り負ひて出で、往けば別を惜しみ歎きけむ妻

四三三 雞が鳴く東國男子の妻別れ悲しくありけむ年の緒永み

右二月八日、兵部少輔大伴宿禰家持

四三四 海原を遠く渡りて年経とも兒等が結べる紐解くな勤

四三五 今替る新防人が船出する海原の上に浪な開きそね

四三六 防人の堀江漕ぎ出る伊豆手舟楫取る間なく戀は繁けむ

右の三首は九日大伴宿禰家持が作める、

四三七 水鳥の發ちの急ぎに父母に物言す來にて今ぞ悔しき

右の一首は上丁、有度部牛麿

四三八 疊薦牟良自が磯の離磯の母を離れて行くが悲しさ

右の一首は助 丁、生部道麿

四三九 國巡る當かまけり行巡り歸り來までに齋ひて待たね

右の一首は刑部虫麿

四三四 父母え齋ひて待たね筑紫なる水漬く白玉採りて來までに

右の一首は川原虫麿

四三二 橋のみ衣利の里に父を置きて道の長道は行き難ぬかも

右の一首は丈部足麿

四三〇 眞木柱讀めて造れる殿の如いませ母刀自面變りせず

右の一首は坂田部首麿

四二八 吾等旅は旅と思ほど戀にして面持瘦すらむ我が身悲しも

右の一首は玉作部廣目

四二六 忘らむと野行き山行き我來れど我が父母は忘れせぬかも

右の一首は商長首麿

四二四 吾妹子と二人我が見し打寄する駿河の嶺らは戀しくめあるか

右の一首は春日部麿

四二二 父母が頭搔撫で幸く在れて言ひし言葉ぞ忘れ兼ねつる

右の一首は丈部稻麿

二月七日、駿河國防人部領使守從五位下布勢朝臣人主、實進るは九日、歌の數二十首、

但し拙劣歌十首は取載げず、

四一七 家にして戀ひつゝあらずは汝が佩ける太刀になりても齋ひてしかも

右の一首は國造 丁、日下部使主三申が父の歌

四一六 垂乳根の母を別れてまこと我旅の假廬に安く寐むかも

右の一首は國造丁、日下部使主三申

四一五 百隈の道は來にしを又更に八十島過ぎて別れか行かむ

右の一首は助 丁、刑部直三野

四一四 庭中の阿須波の神に木柴指し我は齋はむ歸り來までに

右の一首は主帳 丁、若麻績部諸人

四一三 旅衣彌つ着重ねて寝ぬれども猶膚寒し妹にしあらねば

右の一首は望陀郡上丁、玉作部國忍

四一二 道の邊の荆の末に蔓ほ豆の纏る君を離れか行かむ

右の一首は天羽郡上丁、丈部鳥

四一一 家風は日に日に吹けど我妹子が家言持ちて來る人もなし

右の一首は朝夷郡上丁、丸子連大歳

四三四 立鴨の發ちの騒ぎに相見てし妹が心は忘れ爲ぬかも

右の一首は長狭郡上丁、丈部與呂磨

四三五 外にのみ見てや渡らも難波渦雲居に見ゆる島ならなくに

右の一首は武射郡上丁、丈部山代

四五六 我が母の袖持ち撫で、我が故に泣きし心を忘らえぬかも

右の一首は山邊郡上丁、物部乎刀良

四三七 蘆垣の隈所に立ちて我妹子が袖もしほゝに泣きしぞ思はゆ

右の一首は市原郡上丁、刑部直千國

四三八 大君の命畏み出で来れば我ぬ取り著きて言ひし子なはも

右の一首は種准部上丁、物部龍

四三九 筑紫方に舳向る船の何時しかも仕へ奉りて本郷に舳向かも

右の一首は長柄郡上丁、若麻績部羊

二月九日、上總國防人部領使少目從七位下茨田連沙彌磨が進る歌の數十九首、但し拙劣

歌六首は取載げず、

私拙懷を陳ふる歌一首并短歌

四六〇

天皇の遠き御代にも、忍照る難波の國に、天の下知らし召しきと、今の世に絶えず言ひつ
つ、懸けまくも奇に畏し、神ながら吾大君の、打摩く春の初は、八千種に花咲き艶ひ、山
見れば見の珍しく、河見れば見の清淨けく、物毎に榮ゆる時と、見し給ひ明め給ひ、敷き
座せる難波の宮は、聞し食す四方の國より、奉る貢の船は、堀江より水脈引きしつ、朝
和に楫引き浜り、夕潮に棹指し下り、味鴨群の騒ぎ競ひて、濱に出でて海原見れば、白波
の八重折るが上に、海士小舟散々に浮きて、大御食に仕へ奉ると、遠近に漁り釣りけり、
幾許も廣大無き哉、許多も寛けきかも、此見れば宜し神代ゆ、創めけらしも

反歌

四六一 櫻花今盛なり難波の海押照る宮に聞し召すなべ

四六二 海原の寛けき見つ、蘆が散る難波に年は經ぬべく思ほゆ

右二月十三日、兵部少輔大伴宿禰家持

四六三 難波津に御船下居ゑ八十楫貫き今は撈ぎぬと妹に告げこそ

四六四 防人に發たむ騒ぎに家の妹が業るべき事を言はず來ぬかも

右の二首は茨城郡、若舍人部廣足

四六五 押照るや難波の津より船装ひ我は撈ぎぬと妹に告げこそ

四六六 常陸指し行かむ雁もが我が戀を記して附けて妹に知らせむ
右の二首は信太郡、物部道足

四六七 我が面の忘れも時は筑波嶺を振放け見つゝ妹は慕ばね
右の一首は茨城郡、占部小龍

四六八 久慈川は平安く在り待て海船に眞楫繁貫き我は歸り來む
右の一首は久慈郡、丸子部佐壯

四六九 筑波嶺の五月百合の花の夜床にも愛しけ妹ぞ晝も愛しけ
四七〇 霰降り鹿島の神を祈りつゝ皇御軍に我は來にしを

右の二首は那賀郡上、大舍人部千文

四七一 橋の下吹く風のかぐはしき筑波の山を戀ひすあらめかも
右の一首は助、丁、占部廣方

四七二 足柄の御坂た廻り、顧みず我は越え行く、荒男も立しや憚る、不破の關越えて我は行く、
馬の蹄筑紫の崎に、留り居て我は齋はむ、諸は平安くと申す、歸り來までに
右の一首は倭文部可良麿

二月十四日、常陸國部領防人使大目正七位上息長眞人國島が進れる歌の數十七首、但し

拙劣歌七首は取載せず、

四七三 今日よりは顧みなくて大君の醜の御楯と出立つ吾は
右の一首は火長、今奉部與曾布

四七四 天地の神祇を祈りて幸矢貫き筑紫の島を指して行く吾は
右の一首は火長、大田部荒耳

四七五 松の木の並みたる見れば家人の吾を見送ると立たりし如
右の一首は火長、物部眞島

四七六 旅行に行くとは知らずて母父に言申さずて今ぞ悔しけ
右の一首は寒川郡上丁、川上巨老

四七七 母刀自も玉にもがもや頂きて角髪の中に相纏かまくも
右の一首は津守宿禰小黒栖

四七八 月日は過ぐは往けども母父が玉の姿は忘れ爲なふも
右の一首は都賀郡上丁、中臣部足國

四七九 白浪の寄せる濱邊に別れなば甚も術無み幾遍袖振る
右の一首は足利郡上丁、大舍人部禰麿

四三〇 難波門を漕出て見れば神さぶる生駒高嶺に雲ぞ棚引く

右の一首は梁田郡上丁、大田部三成

四三一 國々の防人集ひ船乗りて別るを見れば甚も術無し

右の一首は河内郡上丁、神麻績部島磨

四三二 太小腹懸しけ人なり疝病我がする時に防人に差す

右の一首は那須郡上丁、大伴部廣成

四三三 津の國の海の渚に船装ひ發し出も時に母が目もがも

右の一首は鹽屋郡上丁、丈部足人

二月十四日、下野國防人部領使、正六位上田口朝臣大戸が進れる歌の數十八首、但し拙

劣歌七首は取載げず、

四三四 曉の彼は誰時に島陰を漕ぎにし船のたづき知らずも

右の一首は助、丁海上郡海上國造、池田日奉直得大理

四三五 行向に浪音動ひ後方には子をと妻をと置きてとも來ぬ

右の一首は葛飾郡、私部石島

四三六 吾が門の五十津株柳何時も何時も母が戀すな業ましつゝも

右の一首は結城郡、矢作部眞長

四三七 千葉の野の兒手柏の含まれど奇に愛憐しみ置きて發ち來ぬ

右の一首は千葉郡、大田部足人

四三八 旅と曰ど眞旅になりぬ家の妹が着せし衣に垢附きにかり

右の一首は占部虫磨

四三九 海船の舳越そ白浪俄しくも科せ賜ほか思合へなくに

右の一首は印波郡、丈部直大歳

四四〇 群玉の樞に釘刺し結めとし妹が心は危く無めかも

右の一首は猿島郡、刑部志加磨

四四一 國々の社の神に幣帛奉り贖祈すなむ妹が憐しさ

右の一首は結城郡、忍海部五百磨

四四二 天地の何れの神を祈らばか愛し母に又言問はむ

右の一首は埴生郡、大伴部麻與佐

四四三 大君の勅命に有れば父母を齋瓮と置きて參出來にしを

右の一首は結城郡、雀部廣島

四三四 大君の勅命畏み夢のみにさ寝か渡らむ長け此の夜を

右の一首は相馬郡、大伴部子羊

二月十六日、下總國防人部領使、少目從七位下 縣 犬養宿禰淨人が進れる歌の數二十二首、但し拙劣歌十一首は取載げず、

獨り龍田山の櫻花を惜める歌一首

四三五 龍田山見つゝ越え來し櫻花散りか過ぎなむ我が還る時に

獨り江水に浮べる木屑を見て貝玉の依らざるを怨恨みて詠める歌一首

四三六 堀江より朝潮滿に寄る木屑貝にありせば家裏にせましを

館の門にて江南の美女を見て詠める歌一首

四三七 見渡せば向つ峯の上の花艶ひ照りて立てるは愛しき誰が妻

右の三首は二月十七日、兵部少輔大伴宿禰家持が作める、

防人の情に爲りて思を陳べて詠める歌一首并短歌

四三六 大君の勅命畏み、妻別れ悲しくはあれど、丈夫の心振興し、とり裝束ひ門出をすれば、垂

乳根の母搔撫で、若草の妻は取付き、平けく我は齋はむ、平安くて早還り來と、眞袖持ち

涙を拭ひ、咽びつゝ言語すれば、群鳥の出立ちがてに、滞り顧みしつゝ、彌遠に國を來離

れ、彌高に山を越え過ぎ、蘆が散る難波に來居て、夕潮に船を浮け据ゑ、朝和に舳向け撈がむと、侍候ふと我が居る時に、春霞島廻に立ちて、鶴が音の悲しく鳴けば、遙々に家を思ひ出、負征矢のそよと鳴るまで、歎きつるかも

反歌

四三九 海原に霞棚引き鶴が音の悲しき宵は國方し思ほゆ

四四〇 家思ふと寐を寢ず居れば鶴が鳴く葦邊も見えず春の霞に

右十九日、兵部少輔大伴宿禰家持が作める、

四四一 唐衣裾に取着き泣く兒等を置きてぞ來ぬや母なしにして

右の一首は國造、小縣郡、他田舍人大島

四四二 千早振る神の御坂に幣帛奉り齋ふ命は母父が爲

右の一首は主帳、埴科郡、神人部子忍男

四四三 大君の勅命畏み青雲の棚引く山を越よて來ぬかむ

右の一首は小長谷部等齋

二月二十二日、信濃國防人部領使、上道にて病を得て來らず、進れる歌の數十二首、但し

拙劣歌九首は取載げず、

四四四 難波道を往きて來までと我妹子が着けし紐が緒絶えにけるかも

右の一首は助丁、上毛野牛甘

四四五 我が妹子が慕びにせよと着けし紐糸になるとも我は解かじとよ

右の一首は朝倉益人

四四六 我が家ろに行か人も草枕旅は苦しと告げ遣らまくも

右の一首は大伴部節麿

四四七 純溟滓り碓日の坂を越えしだに妹が戀しく忘れぬかも

右の一首は他田部子磐前

二月二十三日、上野國防人部領使、大目正六位下上毛野君駿河が進れる歌の數十二首、

但し拙劣歌八首は取載げず、

防人の悲別の情を陳ぶる歌一首并短歌

四四八 大君の任の隨意に、防人に我が發ち來れば、柞葉の母の命は、御裳の裾抓擧げ搔撫で、ちの實の父の命は、栲綱の白鬚の上ゆ、涙垂り歎き宣賜く、鹿兒じもの唯一人して、朝戸出の悲しき我が子、荒玉の年の緒永く、相見ずは戀しくあるべし、今日だにも言問ひせむと、惜しみつゝ悲しび座せ、若草の妻も兒等も、彼此に多に圍み居、春鳥の聲の吟ひ、白

細布の袖泣き沾らし、携はり別れ難にと、引き止め慕ひしものを、天皇の勅命畏み、玉梓の道に出で立ち、丘の岬い廻むる毎に、萬度願みしつゝ、遙々に別れし來れば、思ふ心安くもあらず、戀ふる心苦しきものを、現身の世の人なれば、魂極命も知らず、海原の長き道を、島傳ひい擲ぎ渡りて、在り廻り我が來るまでに、平けく親は座さね、恙無く妻は待たせと、住吉の我が皇神に、幣帛奉り祈り申して、難波津に船を浮け据ゑ、八十楫貫き水手整へて、朝びらき我は漕き出ぬと、家に告げこそ

反歌

四四九 家人の齋へにかあらむ平けく船出はしぬと親に申さね

四一〇 御空行く雲も使と人は言へど家裏遣らむ爲方知らずも

四一一 家裏に貝ぞ拾へる濱浪は彌重々に高く寄すれど

四一二 島陰に我が船泊て、告げやらむ使を無みや戀ひつゝ行かむ

二月二十三日、兵部少輔大伴宿禰家持

四一三 枕刀腰に取り佩き眞愛しき夫ろが罷來む月の知らなく

右の一首は上丁、那珂郡、檜前舍人石前が妻、大伴眞足女

四一四 大君の勅命畏み愛しけ眞子が手離れ島傳ひ行く

右の一首は助丁、秩父郡、大伴部少歳

四二五 眞珠しらたまを手に取り持して見る如ごとすも家なる妹を又見てもやも
右の一首は主帳、荏原郡、物部歳徳

四二六 草枕旅行せむしく夫が丸寝せば家なる吾は紐解かず寝む
右の一首は妻、椋部刀自賣

四二七 赤駒あかこまを山野に放し捕り不得て多摩の横山歩ゆか遣らむ
右の一首は豊島郡上丁、椋部荒虫が妻、宇遲部黒女

四二八 我が門かどの傍山椿たなづき實み汝我が手觸れな、地に墮ちもかも
右の一首は荏原郡上丁、物部廣足

四二九 家ろには葦火あしび焚けども住み吉よけを筑紫に到りて戀しけ思はも
右の一首は橘樹郡上丁、物部眞根

四三〇 草枕旅せむしの丸寝の紐絶えば吾が手と着ける此の鉞持し
右の一首は妻、椋部弟女

四三一 吾が行ゆきの息衝いきつくしかば足柄あしはらの峯延ほ雲を見と、俣まばね
右の一首は都筑郡上丁、服部於由

四三二 吾が夫せなを筑紫へ遣りて愛うつくしみ帯は解かな、奇あやにかも寝も
右の一首は妻、服部皆女

四三三 足柄あしはらの御坂みさかに立たて袖振らば家なる妹は清さやに見もかも
右の一首は埼玉郡上丁、藤原部等母磨

四三四 色深いろこほく夫が衣は染めましを御坂みさかた廻らばま清さやかに見む
右の一首は妻、物部刀自賣

四三五 防人さきもりに行くは誰が夫と問ふ人を見るが羨とほしさ物思ひもせず
二月二十幾日、武藏國部領防人使、掾正六位上安曇宿禰三國が進まれる歌の數二十首、但し拙劣歌八首は取載げず、

四三六 天地あめつちの神祇かみに幣帛ぬぎ置き齋いはひつゝ座いせ我が夫我をし思は
二月二十幾日、武藏國部領防人使、掾正六位上安曇宿禰三國が進まれる歌の數二十首、但し拙劣歌八首は取載げず、

四三七 家の妹いへる吾を思しぶらし眞結まゆすびに結ゆびし紐ひもの解とくらく思へば
二月二十幾日、武藏國部領防人使、掾正六位上安曇宿禰三國が進まれる歌の數二十首、但し拙劣歌八首は取載げず、

四三八 我が夫せなを筑紫は遣りて愛うつくしみ帯は解かな、奇あやにかも宿ねむ
二月二十幾日、武藏國部領防人使、掾正六位上安曇宿禰三國が進まれる歌の數二十首、但し拙劣歌八首は取載げず、

四三九 廐うまやなる繩絶なつ駒うまの後あとるがへ妹が言いひしを置おきて悲かなしも
二月二十幾日、武藏國部領防人使、掾正六位上安曇宿禰三國が進まれる歌の數二十首、但し拙劣歌八首は取載げず、

四四〇 荒男あらしのい小箭手せき挟さみ向むかひ立ちかなる間鎮ま鎮しんみ出いでてと吾が來ある
二月二十幾日、武藏國部領防人使、掾正六位上安曇宿禰三國が進まれる歌の數二十首、但し拙劣歌八首は取載げず、

四四一 小竹こたけが葉はのさやぐ霜夜しもよに七重ななへ着かる衣ころもに益こせる子ころが膚はだはも
二月二十幾日、武藏國部領防人使、掾正六位上安曇宿禰三國が進まれる歌の數二十首、但し拙劣歌八首は取載げず、

四三二 障敢へぬ勅命にあれば愛憐し妹が手枕離れ奇に悲しも

右の八首は昔年の防人の歌なり、主典刑部少録正七位上磐余忌寸諸君が抄寫けて兵部少輔大伴宿禰家持に贈れり、

三月三日、防人を檢校ふる勅使并兵部使人等、同に集ひて飲宴する時詠める歌三首

四三三 朝朝上る雲雀になりてしか都に行きて早歸り來む

右の一首は勅使紫微大弼安部沙美麿朝臣

四三四 雲雀上る春邊と清になりぬれば都も見えず霞棚引く

四三五 含めりし花の初に來し我や散りなむ後に都へ行かむ

右の二首は兵部少輔大伴宿禰家持

昔年相替れる防人が歌一首

四三六 闇の夜の行く先知らず行く吾を何時來まさむと問ひし兒等はも

先太上天皇(元正天皇)の霍公鳥を御製ませる歌一首

四三七 霍公鳥猶も鳴かなむ舊つ人懸けつゝもとな朕を哭し泣くも

薩妙觀か詔を應りて和へ奉れる歌一首

四三八 霍公鳥此處に近くを來鳴きてよ過ぎなむ後に益あらめやも

冬日靱負の御井に幸し、時、内命婦石川朝臣 諱を昌葉といふ詔を應りて雪を賦める歌一首

四三九 松が枝の地に着くまで降る雪を見すてや妹が籠り居るらむ

其時水主内親王、寢膳安からず、累日參り給はず、因此日太上天皇侍婦等に勅り曰く、水主内親王の爲に雪を賦みて奉れと勅り給へり、於是諸命婦等作歌しかねたれば、此石川命婦獨り此歌を詠みて奏せりき、

右件の四首は上總國大掾正六位上大原真人今城傳誦めり云爾 年月未詳

上總國朝集使大掾大原真人今城が京に向へる時、郡司の妻女等が餞せる歌二首

四四〇 足柄の八重山越えてい座しなば誰をか君と見つゝ偲ばむ

四四一 立姿ふ君が姿を忘れずは生涯にや戀ひ渡りなむ

五月九日、兵部少輔大伴宿禰家持が宅にて集飲せる歌四首

四四二 我が兄子が宿の瞿麥日並べて雨は降れども色も變らず

右の一首は大原真人今城

四四三 久方の雨は降り重く瞿麥が彌初花に戀しき我が兄

右の一首は大伴宿禰家持

四四四 我が兄子が宿なる萩の花咲かむ秋の夕は吾を偲ばせ

右の一首は大原真人今城

四四五 鶯の聲は過ぎぬと思へども染みにし心なほ戀ひにけり
右の一首は即ち鶯の啼くを聞きて詠める、大伴宿禰家持

同月十一日、左大臣橘卿の右大辨丹比國人眞人が宅に宴し給ふ歌三首

四四六 我が宿に咲ける瞿麥幣は爲むゆめ花散るな彌反覆に咲け

右の一首は丹比國人眞人が左大臣を壽く歌

四四七 幣しつゝ君が生せる瞿麥が花のみ訪はむ君ならなくに

右の一首は左大臣の和へ給ふ歌

四四八 紫陽花の彌重咲く如く彌つ世にをい座せ我が兄子見つゝ俣ばむ

右の一首は左大臣の紫陽花に寄せて詠み給へる、

十八日、左大臣兵部卿橘奈良麿朝臣が宅に宴し給ふ歌三首

四四九 瞿麥が花取り持ちて熟々見まくの欲しき君にもあるかも

右の一首は治部卿船王

四五〇 我が兄子が宿の瞿麥散らめやも彌初花に咲きは益すとも

四五二 愛しみ我が思ふ君は瞿麥が花に比へて見れど飽かぬかも

右の二首は兵部少輔大伴宿禰家持が追ひて詠める、

八月十三日、内の南の安殿にて肆宴し給へる時の歌二首

四五三 少女等が玉裳裾引く此の庭に秋風吹きて花は散りつゝ

右の一首は内匠頭兼播磨守正四位下安宿王奏したまへり、

四五五 秋風の吹き抜き敷ける花の庭清き月夜に見れど飽かぬかも

右の一首は兵部少輔從五位上大伴宿禰家持 未奏

十一月二十八日、左大臣兵部卿橘奈良麿朝臣が宅に集ひて宴し給ふ歌一首

四五四 高山の巖に生ふる菅の根のねもころくりに降り置く白雪

右の一首は左大臣の作みたまへる、

天平元年、班田の時の使葛城王、山城國より薩妙觀の命婦等が所に贈り給へる歌一首 芹子の

葉に副へたり

四五五 あかねさす晝は策びて射干玉の夜の暇に摘める芹これ

薩妙觀命婦が報贈ふる歌一首

四五六 丈夫と思へるものを太刀佩きて樺の田井に芹ぞ摘みける

右の二首は左大臣讀みあげたまへり云爾、

八歲丙申三月朔乙酉二十四日戊申、天皇、太上天皇、皇太后、河内離宮に幸行して信信を經て壬子に難波宮に傳幸し、三月七日河内國伎人卿の馬史國人が家にて宴し給ふ歌三首

四五七 住吉の濱松が根の下延へて我か見る小野の草な刈りそね

右の一首は兵部少輔大伴宿禰家持

四五八 鴉鳥の息長河は絶えぬとも君に語らむ言盡きめやも

右の一首は主人散位寮散位馬史國人

四五九 蘆荊ると堀江漕ぐなる楫の音は大宮人の皆聞くまでに

右の一首は式部少丞大伴宿禰池主讀みあく、即ち云へらく兵部大丞大原真人今城、先日他所にて讀みあげし歌なりといへり、

四六〇 堀江漕ぐ伊豆手の船の楫つくめ音屢立ちぬ水脈早みかも

四六一 堀江より水脈遡る楫の音の間無くぞ奈良は戀しかりける

四六二 舟競ふ堀江の川の水際に來居つゝ鳴くは都鳥かも

右の三首は江邊にて作める、

四六三 時鳥先づ鳴く朝開如何にせば吾が門過ぎじ語り告ぐまで

四六四 時鳥懸けつゝ君を松蔭に紐解き放くる月近づきぬ

右の二首は二十日、大伴宿禰家持興に依けて作める、

族を喻す歌一首并短歌

四六五 久方の天の戸開き、高千穂の峰に天降りし、皇祖の神の御代より、梶弓を手握り持たし、眞鹿兒矢を手挟み添へて、大久米の丈夫武雄を、先に立て鞆取り負せ、山河を岩根さくみて、履みとほり國覓しつゝ、千早振る神を言向け、服従はぬ人も和し、掃き清め仕へ奉りて、秋津島大和の國の、檜原の畝火の宮に、宮柱太知り立て、天の下知らし召しける、皇祖の天の日嗣と、次ぎて來る君の御代御代、隠さはぬ赤き心を、皇方に極め盡して、仕へ來る遠祖の職業と、事立て、授け給へる、子孫の彌繼々に、見る人の語り次ぎて、聞く人の鑑にせむを、惜しき清き其の名ぞ、大凡に心思ひて、虚言も遠祖の名斷つな、大伴の氏と名に負へる、健男の伴

反歌

四六六 敷島の日本の國に明けき名に負ふ伴の緒心勤めよ

四六七 劔刀愈研ぐべし古ゆ清けく負ひて來にしその名ぞ

右、淡海真人三船が讒言に縁りて出雲守大伴古慈悲宿禰仕解けぬ、是以家持此歌を詠めり、臥病て無常を悲しみ修道せまくして詠める歌二首

四四六 現身は數なき身なり山河の清けき見つゝ道を尋ねな
四四九 渡る日の陰に競ひて尋ねてな清き其の道又も遇はむため

壽を願ひて詠める歌一首

四七〇 泡沫なす假れる身ぞとは知れゝども猶し願ひつ千歳の命を

以前の歌六首は六月十七日、大禰宿禰家持が作める、

冬十一月五日夜、少雷起鳴雪落覆庭、忽情感憐て詠める短歌一首

四七一 消残りの雪に合照る足引の山橋を裏に摘み來な

右の一首は兵部少輔大伴宿禰家持

四七二 大君の勅命畏み於保の浦を背向に見つゝ都へ上る

八日、讚岐守安宿王等出雲掾安宿奈杼磨が家に集ひて宴し給ふ歌二首

右の一首は掾安宿奈杼磨

四七三 うちひさす都の人に告げまは見し日の如く在りと告げこそ

右の一首は守山背王の歌なり、主人安宿奈杼磨語り云らく、奈杼磨朝集使に差され、京師に

入むとす、此に因りて、餞する日、各歌を詠みて聊所心を陳ぶ、

四七四 群鳥の朝發ち往にし君が上は清かに聞きつ思ひし如く

右の一首は兵部少輔大伴宿禰家持、後日出雲守山背王の歌に追ひて和ふる作、

二十三日、式部少丞大伴宿禰池主が宅に集ひて飲宴する歌二首

四七五 初雪は千重に降り重け戀しくの多かる吾は見つゝ偲ばむ

四七六 奥山のしきみが花の名の如や重々君に戀ひ渡りなむ

右の二首は兵部大丞大原真人今城

智努女王の卒せたまへる後、圓方女王の悲傷みて詠み給へる歌一首

四七七 夕霧に千鳥の鳴きし佐保道をば荒しやしてむ見る由をなみ

大原櫻井真人が佐保川の邊を行く時詠める歌一首

四七八 佐保河に凍り渡れる薄氷の薄き心を我が思はなくに

藤原夫人の歌二首 淨御原宮御宇天皇(天武天皇)之夫人也、字曰氷上大刀自也

四七九 朝宵に哭のみし泣けば焼太刀の利心も吾は思ひかねつも

四八〇 長きや天の朝廷を懸けつれば哭のみし泣かゆ朝宵にして

右件の四首、傳讀むは兵部大丞大原今城

九歳三月四日、兵部大丞大原真人今城が宅にて宴する歌二首

四八一 足引の八峯の椿熟々に見とも飽かめや植ゑてける君

四八二 右の一首は兵部少輔大伴宿禰家持が植椿を屬て詠める、
堀江越え遠き里まで送りける君が心は忘らゆまじも

右の一首は播磨介藤原朝臣執弓、任に赴くときの別悲の歌也、主人大原今城傳讀めりき、
六月二十三日、大監物三形王の宅にて宴する歌一首

四八三 移り行く時見る毎に心痛く昔の人し思ほゆるかも

右兵部大輔大伴宿禰家持が作める、

四八四 咲く花は移るふ時あり足引の山菅の根し長くはありけり

右の一首は大伴宿禰家持が物色の變化を悲怜みて詠める、

四八五 時の花彌めづらしも斯くしこそ見し明め、秋立つ毎に

右の一首は大伴宿禰家持が作める、

天平寶字元年十一月十八日、内裏にて肆宴きこしめす歌二首

四八六 天地を照らす日月の極無く有るべきものを何をか思はむ

右の一首は皇太子の御製

四八七 いざ兒等狂行な爲そ天地の固めし國ぞ大和島根は

右の一首は内相藤原朝臣の奏したまふ、

十二月十八日、大監物三形王の宅にて宴する歌三首

四八八 み雪降る冬は今日のみ鶯の鳴かむ春邊は明日にしあるらし

右の一首は主人三形王

四八九 打靡く春を近みか射干玉の今宵の月夜霞みたるらむ

右の一首は大藏大輔甘南備伊香眞人

四九〇 荒玉の年行き歸り春立たば先づ我が宿に鶯は鳴け

右の一首は右中辨大伴宿禰家持

四九一 大き海の水底深く思ひつゝ裳引き平し、菅原の里

右の一首は藤原宿奈磨朝臣が妻、石川女郎が、薄愛離別、悲恨作歌也 年月未詳

二十三日、治部少輔大原今城眞人が宅にて宴する歌一首

四九二 月數めば未だ冬なり乍然に霞棚引く春立ちぬとか

右の一首は右中辨大伴宿禰家持

二年春正月三日、侍從堅子王臣等を召して内裏の東屋の垣下に侍はしめ、即ち玉箒を賜ひて肆宴きこしめす、ときに内相藤原朝臣勅を奉りて宜く、諸王卿等隨堪任意に作歌并賦詩とのりたまへり、仍詔旨の應各心緒を陳べて歌よみ詩つくれり 未得諸人之賦詩并作歌也

四九三 初春の初子の今日の玉箒手に執るからに鏘鳴ぐ玉の緒

右の一首は右中辨大伴宿禰家持が作める、但し大藏政に依りて堪奏さざりき、

四九四 水鳥の鴨の羽の色の青馬を今日見る人は限なしと云ふ

右の一首は七日の侍宴の爲に右中辨大伴宿禰家持此歌を預作めり、但し仁王會の事に依り

却以六日内裏に諸王卿等を召して酒を賜ひ肆宴きこしめし祿給へるに因りて奏さざりき、

六日、内庭に假に樹木を植ゑて林帷と作て肆宴きこしめす歌一首

四九五 打靡く春とも著く鶯は植木の樹間を鳴き渡らなむ

右の一首は右中辨大伴宿禰家持 未奏

二月某日、式部大輔中臣清麿朝臣が宅にて宴する歌十首

四九六 恨めしく君はもあるか宿の梅の散り過ぐるまで見しめすありける

右の一首は治部少輔大原今城真人

四九七 見むと云はど否と云はめや梅の花散り過ぐるまで君が來まさぬ

右の一首は主人中臣清麿朝臣

四九八 愛しきよし今日の主人は磯松の常に座さね今も見る如

右の一首は右中辨大伴宿禰家持

四九九 我が兄子し斯くし宣さば天地の神祇を乞ひ祈み永くとぞ思ふ

右の一首は主人中臣清麿朝臣

四五〇 梅の花香を芳馥しみ遠けども心も萎ぬに君をしぞ思ふ

右の一首は治部大輔市原王

四五一 八千種の花はうつろふ常磐なる松の小枝を我は結ばな

右の一首は右中辨大伴宿禰家持

四五二 梅の花咲き散る春の永き日を見れども飽かぬ磯にもあるかも

右の一首は大藏大輔甘南備伊香真人

四五三 君が家の池の白浪磯に寄せ屢々見とも飽かむ君かも

右の一首は右中辨大伴宿禰家持

四五四 愛しと我が思ふ君は彌日々に來ませ我が兄子絶ゆる日なしに

右の一首は主人中臣清麿朝臣

四五五 磯の裏に常喚び來棲む鴛鴦の惜しき我が身は君が任意に

右の一首は治部少輔大原今城真人

興に依りて各高圓の離宮處を思ひて詠める歌五首

四五〇六 高圓の野の上の宮は荒れにけり立たし君の御代遠ぞけば

右の一首は右中辨大伴宿禰家持

四五〇七 高圓の峯の上の宮は荒れぬとも立たし君の御名忘れめや

右の一首は治部少輔大原今城真人

四五〇八 高圓の野邊蔓ふ葛の末終に千代に忘れむ我が大君かも

右の一首は主人中臣清麿朝臣

四五〇九 蔓ふ葛の絶えず偲ばむ大君の御覽し野邊には標結ふべしも

右の一首は右中辨大伴宿禰家持

四五一〇 大君の繼ぎて御覽すらし高圓の野邊見る毎に哭のみし泣かゆ

右の一首は大藏大輔甘南備伊香真人

山齋を屬目て詠める歌三首

四五一一 鴛鴦の住む君が此島今日見れば馬酔木の花も咲きにけるかも

右の一首は大監物御方王

四五一二 池水に影さへ見えて咲き艶ふ馬酔木の花を袖に扱入れな

右の一首は右中辨大伴宿禰家持

四五一三 磯陰の見ゆる池水照るまでに咲ける馬酔木の散らまく惜しも

右の一首は大藏大輔甘南備伊香真人

二月十日、内相の宅にて勃海大使小野田守朝臣等を 餞する宴の歌一首

四五一四 蒼海原風波靡き行時來時障むことなく船は早けむ

右の一首は右中辨大伴宿禰家持未誦

七月五日、治部少輔大原今城真人が宅にて因幡守大伴宿禰家持を 餞する宴の歌一首

四五一五 秋風の末吹き靡く萩の花共に挿頭さす相か別れむ

右の一首は大伴宿禰家持が作める、

三年春正月一日、因幡國廳にて國郡司等を賜饗する宴の歌一首

四五一六 新しき年の始の初春の今日降る雪の彌重け吉事

右の一首は守大伴宿禰家持が作める、

萬葉集下編終

いてふ本校訂者

川添文子	郷白巖	村上靜人	所金藏	山田三子	石村貞吉	山内素行	泉斜汀	杉谷代水	山田美妙	沼波瓊音
------	-----	------	-----	------	------	------	-----	------	------	------

昭和十年七月廿四日印刷
昭和十年七月三十日發行

不許
複製

發行所

いてふ本
萬葉集下
定價
金五拾錢

編輯者 三教書院編輯部

代表者 鈴木種次郎

發行者 東京市中野區高根町六番地 鈴木種次郎

印刷者 東京市神田區錦町三丁目十一番地 白井赫太郎

印刷所 東京市神田區錦町三丁目十一番地 精興社

東京市中野區高根町六番地 三教書院

營業所 電話 東京市中野區四丁目一〇番地 振替 東京市神田區錦町二丁目四〇番地 電話 東京市神田區錦町二丁目四〇番地

67
418

いてふ本刊行の辭

現今の讀書界が嘗ての諸外來思想偏重より翻つて、漸く自國の過去に於ける產物に對して新たに注目し始めた事は、當然の推移とは云へ喜ぶべき現象である。顧みて現時の我國出版界を見るに、日々發行される書物の如何に多いかは暫く措き、所謂實際に類するものが非常に多く、やゝ見るべきものは概して高價なる爲一般的でないか、或は豫約出版等により讀者の自由選擇を拒否するが如きものが多い。弊院は右の缺陷を除く意味より、此度多大の犠牲を覚悟して、内容・装帧・價格の點に於ては、絶對に他の追従を許さざる『いてふ本』の刊行を企てた。蒐むるところ、古典といはず、輕文學といはず、雅といはず、俗といはず、韻文といはず、散文といはず、過去の日本が産める文藝作物の一切はもとより、必ずしも本邦を範圍とせず、漢籍中必讀のものを選み、必ずしも文藝を範圍とせず、經世修養其他の書を選び、廣く讀書界に提供し以て現下の缺陷を補はむとす。大方の御支持を期待して已まない所以である。

昭和十年五月

三教書院主

いてふ本書目

昭和十年
六月出來のもの

古事記	全	武經七書	全
萬葉集	上下	唐詩選	全
枕草子	全	三體詩	全
平家物語	上中下	曾我物語	上下
徒然草	全	雨月物語	全
神皇正統記	全	附世間猿蓑諸道聽耳	全
附吉野拾遺	全	日蓮大士眞實傳	全
近松心中物	全	新編水滸畫傳	一
西鶴物	全	東海道中膝栗毛	上下
俳諧七部集	全	修紫田舎源氏	一二
蕪村七部集	全	釋迦八相倭文庫	一二
武將感狀記	全	いろは文庫	上下

和裝の表紙は始めに絲の綴目の處にしつかりと折り目を付けて下さい。さうすれば表紙に皺がよらず耐久力は殆ど永久的です。



終

